様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24 年　5 月　31 日現在

機関番号：13201
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2010　～　2011
課題番号：22720153
研究課題名（和文）　漢文訓読の観点から見た中期朝鮮語諺解資料に関する新研究

研究課題名（英文）　A New Study of Middle Korean *Ŏnhae* from the Perspective of *Hanmun Hundok*

研究代表者
上保　敏（JOHO SATOSHI）
富山大学・人文学部・講師
研究者番号：80553114

研究成果の概要（和文）：本研究は，中期朝鮮語の諺解資料を新たな視点から見つめ直し，当時の朝鮮に於ける漢文訓読の在り方を解明しようとした。諺解文が漢文訓読の結果としての書き下し文に該当するものと見なしうること，15 世紀の朝鮮における漢文訓読にあっては，個々の漢字に対する訓がかなり固定化をしており，漢文に対する固定的な訓法が発達していたものと見ることができることなどが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This study aims to pursue middle Korean *Ŏnhae* from the new point of view, and to investigate a model of *Hanmun Hundok,* a vernacular reading of Chinese texts in Korea. We conclude that *Ŏnhaemun* can be considered *Hundongmun*, a result of *Hanmun Hundok, Hun* of Chinese characters had been fixed, and *Hunpŏp* of Chinese texts had been also fixed of Korean *Hanmun Hundok* in the 15th century.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：朝鮮語学・言語学・漢文訓読・国際情報交換・韓国

１．研究開始当初の背景

現代朝鮮語において，漢字は常に音読のみがなされ，日本語の如く訓読がなされることはない。また，漢文を講読する際にも，句節の切れ目のところどころに助詞や語尾に当たる吐を挿入しながらも，朝鮮漢字音によって漢文の語順の通りに直読し，日本語のような漢文訓読がなされることはない。

ただし，朝鮮でも高麗時代の『旧訳仁王経』の発見以降，これまで 5 種ほどの漢文訓読資料が発見され，朝鮮でもかつて訓読が存在していたという点については，疑いの余地もなくなった。また，訓読は高麗時代のみならず，李朝時代以降にも微々たるながら存在していたことが，安秉禧(1976)や南豊鉉・沈在箕(1976)，藤本幸夫(1992，1993)などの研究により明らかにされている。さらに，16 世紀以

降の『千字文』や『訓蒙字会』などの漢字の字典類には，それぞれの漢字に対して訓と音とが併記されており，この様式は現代の漢字字典にも引き継がれている。(ただし，現代人はそれらの「訓」を漢字の義としてのみ理解しているのであるが)

ところが，朝鮮では，現代に至る過程で，「訓読という理解の仕方をやめてしまった」[吉田金彦ほか 編(2001)]というのが一般的な理解である。特に 15 世紀以降の朝鮮語を知るための主たる資料である諺解資料の場合，漢文原文のところどころに吐を入れた口訣文がまず登場し，その次にその訳文に当たる諺解文が掲げられる，というのが，当時の資料の一般的な姿である。すなわち，諺解文は漢文原文に対する朝鮮語の翻訳文である。従来の研究でも，漢文原文と諺解文とを対照し，その翻訳関係を論ずるものは，少なからず存在し，様々な言語現象に際して，漢文翻訳との関連から論ずるものもまた存在していた。

しかし従来の研究で欠けていた視点として，諺解文に対する漢文訓読の観点からの接近，という点をあげることができるのはないかと思われる。諺解文を事実上の訓読文あるいは書き下し文に当たるものとして取り扱うことが可能ではないか，ということである。

これは単に「翻訳」という言葉を「訓読」という言葉に置き換えただけの用語上の問題ではなく，それ以上の高い位置づけを与えることである。すなわち，諺解文を漢文の実際の講読文として取り扱う，ということである。それによって，これまで見えてこなかった漢字・漢文に対する朝鮮語の姿が浮彫りになると思われるのである。

本研究では，以上のような視点から中期朝鮮語の諺解資料に現れる漢文と諺解文の関係について追求することにした。

２．研究の目的

その上で，本研究では以下の 4 つの点について明らかにすることを目的とした。

(1) 15 世紀の朝鮮における漢文学習の在り方について明らかにする

朝鮮半島では古来より漢文の学習が行われてきたが，漢文の学習は音読と訓読の 2 種類があった。そのうち，中期朝鮮語の諺解資料の諺解文を訓読文あるいは書き下し文と見なせれば，当時の漢文学習の在り方の一端を明らかにできるであろう。またこれは，諺解文を漢文原文の単なる翻訳文としか見ていなかった従来の研究とは，明らかに異なる視点である。

(2) 15 世紀における漢字の訓の新たな側面を明らかにする

このような観点から見ることにより，朝鮮における漢字の訓の体系を明らかにすることができるであろう。従来の研究では，主として漢字の字典類に現れる訓をもってして体系化がなされてきた。字典類に現れる訓は，原則的に漢字 1 字に対して単一の訓が示されているが，本研究によりこの体系とはまた異なる訓の体系，すなわち，実際の使用に即した実用的な訓の体系を構築することができるであろう。これもまた，諺解文を漢文本文の単なる翻訳文とだけ考えていては導き出せないものである。

(3) 他の字典類の訓との関係を明らかにする

諺解文から体系化され得る訓を眺めてみると，その訓が他の字典類のものと同じ場合もあり，異なる場合もある。また一部の字典類とのみ同じ場合もある。語源が同じでも品詞が異なるものもある。さらには，字典類から見いだせない漢字の訓をも抽出し得る場合がある。いずれにしても訓の多様性を示してくれるものであり，意義をもっていると言えよう。字典類に現れる訓と相互に補完的役割を果たしてくれるものと期待される。また，1 つの漢字に対して複数個の訓が存在していた点を明らかにできるであろう。

(4) 漢文の訓法や語法の多様性について明らかにする

漢文訓読に際して単純な音読と訓読のみならず，補読や省読，不読，呼応関係など，多様な訓法や語法が確認できるであろうと期待される。こうしたことは，(1)とも関連するが，当時の漢文学習のうち，とりわけ漢文訓読の一側面を浮彫りにしてくれるものである。

３．研究の方法

本研究は，上記の研究目的を達成させるため，以下の如く順序立てて進めていった。原則として，下記の(1)～(2)を初年度に，(3)～(4)を次年度に実施した。

(1) 中期朝鮮語の諺解資料に現れる漢文原文と諺解文との対応関係を漢文訓読の観点からつきあわせる。

(2) 漢文訓読のさまざまな訓法について注目し，原文を音読した部分と訓読した部分，特異な読み方をした部分，読まない部分等を対照させ，リスト化する。

(3) その上で，漢文訓読研究において論点になりうるいくつかの特殊な訓法について，考察を行う。

(4) 当時の朝鮮における漢文訓読のあり方を体系化させる。

これらについて，①コンピュータソフトウェアの活用，②原本調査の実施，③日本や韓国在住の研究協力者との情報交換，④朝鮮語学や朝鮮語史のみならず，日本における漢文訓読研究や漢語文法に関する研究図書の参照等をもって，総合的に執り行った。

４．研究成果

上述の研究方法に則って研究期間に執り行った研究の成果をあげると，以下の通りである。

(1) 朝鮮における漢文の読法としては，古来より音読と訓読が共に行われてきており，それらが漢文学習の必須条件であった点を史料類の記録により確認した。実際に現存する資料においても，音読によるものが音読口訣資料，訓読によるものが釈読口訣資料として残っており，その双方の特徴が見られる資料もまた残されていること，また漢文訓読は李朝時代に入ってもなされてきたことを再確認した。

さらに重要なこととして，これら２つの読法は，音読をした後に訓読をするといった順序で常に一貫していることが明らかになった。

(2) その前提の上で，中期朝鮮語の主要な資料である諺解資料に現れるハングル口訣文と諺解文は，古来より行われてきた漢文読解のこれら２つの読法，すなわち，漢文の音読と訓読の慣習がそれぞれ投射されたものであり，従って諺解文が漢文訓読の結果としての書き下し文に該当するものと見なしうることを確認した。

(3) 諺解資料をもとにして見た 15 世紀の朝鮮における漢文訓読にあっては，個々の漢字に対する訓がかなり固定化をしており，漢文に対する固定的な訓法が発達していたものと見ることができることがわかった。

このことは， 以下の諸点の結果により，詳らかになったものである。

① 日本の漢文訓読において「不読字」とされるような漢字に対する朝鮮における読法を考察した結果，全くの不読字というのは見出しにくく，事実上それらの漢字に該当する助辞を見いだせるものが多く，その訓法にある程度の固定化が見られる点。

② 同じく，日本の漢文訓読で「語の呼応関係」をなしつつ訓じられることのある漢字に対する朝鮮における読法を考察した結果，意味的に類似したいくつかの漢字についても，副詞語や呼応の形態などにおいて，それぞれの漢字ごとに訓法を異にしており，個々の漢字に対する固定的な詞訓や辞訓の認識が見られる点。

③ 漢語史において，2 字が 1 語をなすとされるいわゆる 2 字漢語に対する朝鮮における読法を考察した結果，それらの 2 字漢語の訓読はそれぞれの漢字を 1 字ずつ逐字的に訓じるのが大原則であり，漢語史に起こっていたとされる口語表現での 2 字漢語化という現象には，基本的に関心外であった点。

(4) また，分析を進める中で，漢文訓読の痕跡の見られる資料が，従来より知られているもの以外にも，いくつか存在していることが分かった。

以上の研究成果による意義や今後の展望として，次の 2 点を挙げておきたいと思う。

(1) 第 1 に，朝鮮において古来より行われてきた漢文読解の在り方，とりわけ訓読の在り方が明らかになり，訓法を確定し得た，という点である。また，本研究は一次的には 15 世紀の漢文訓読の解明につながるものであるが，その意義は 15 世紀にとどまらず，その前後を時代的な流れの中でとらえるための基盤になりうるものと考えられる。すなわち，15 世紀以前の漢文訓読の在り方を解明する上でも，15 世紀の漢文訓読の在り方が要になるべきであり，本研究はそうした点からも 15 世紀以前の漢文訓読研究の基礎を供給してくれるものと考えることができる。こうした視点は，従来の高麗時代の釈読口訣資料の研究などでも，比較的，等閑視されてきた感があるように思われる。

(2) 第 2 に，東アジアの漢字文化圏で広く行われてきた漢文訓読の一つの在り方を示し得たという点でも，大きな意義を持っている。漢文訓読が東アジアの漢字文化圏で広く行われてきた言語活動である以上，国際的な視野からこの研究に取り組む必要性に迫られ

ており，本研究は朝鮮における漢文訓読の在り方を示し得た点で，こうした観点からの研究にも大きな貢献をし得るものと考えられる。

言い換えると，第１の意義は，朝鮮の内的な観点から，漢文訓読の時代的な流れの中で位置づけることができる，というものであり，第２の意義は，それが広く国際的な観点からの漢文訓読研究にも一助を与え得る，ということができよう。
本研究は，その双方のあり方についてバランスよく貢献しうる点において，その学術的意義は少なくないものと考えられる。

なお，以上の研究成果として，完成年度の年度末には，東京大学に博士学位論文として提出をするとともに，雑誌論文を発表した
今後も研究期間に得られた知見やデータをもとに，朝鮮半島にかつて存在した漢文訓読について，幅広い視点から解明を続けるとともに，その成果を本務校の学部及び大学院の専門教育にも還元する予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
① 上保 敏(2012)，「初刊本『杜詩諺解』の口訣研究」，『富山大学人文学部紀要』第56号，査読無，pp. 123-161

６．研究組織
(1)研究代表者
上保　敏　（JOHO SATOSHI）
富山大学・人文学部・講師
研究者番号：80553114